

農林水産大臣賞受賞

「焼畑温海かぶ」400年の時をつないだ結いの里

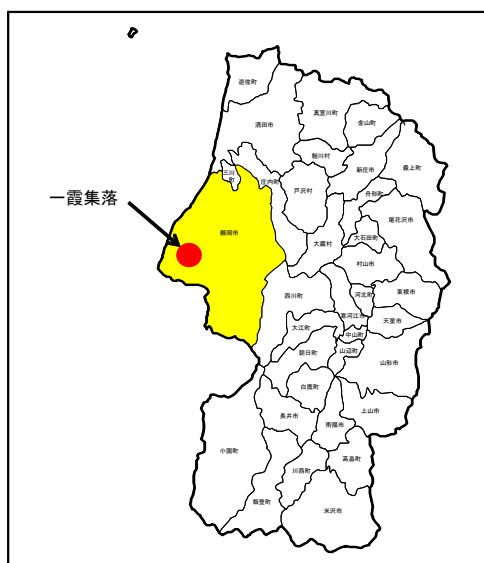
ひと かすみしゅうらく
受賞者 **一霞集落**
やま がた けん つる おか し
(山形県鶴岡市)

■ 地域の沿革と概要

鶴岡市は、平成17年10月1日に6市町村（旧鶴岡市、羽黒町、櫛引町、藤島町、朝日村、温海町）が合併して誕生した。総面積が1,311.51km²と東北地方でもっとも広く、2,000m級の高山から海拔0mまでの高低差があり、幅広い温度帯をつくり出している。四季の変化がはっきりとした気候により、多種多様な農産物や山菜などに恵まれている。市の西側は日本海に面しており、対馬暖流の影響で季節ごとに様々な旬の地魚が水揚げされ、市の北部には広大な庄内平野が広がっており、日本有数の穀倉地帯となっている。

一霞集落のある温海地域（旧温海町）は、鶴岡市の西に位置し、南は新潟県境に接しており、一辺の長さを約16kmとするほぼ正方形の形状をなしている。三方を摩耶山系の豊かな山々に囲まれ、西側には変化に富んだ海岸線が続く、自然の魅力が凝縮された地域である。温海地域の総面積は255.4km²で、その約89%を山林が占め、耕地はわ

第1図 位置図



第1表 地区の概要

事 項	内 容
地区の規模	集落
地区の性格	機能的な集団等
農 家 率 (内訳)	12.4%
	総世帯数 45,514戸
	総農家数 5,651戸
専業別農家数 (内訳)	専業農家 577戸
	1種兼業農家 1,187戸
	2種兼業農家 2,774戸
農用地の状況 (内訳)	総土地面積 131,151ha
	耕地面積 18,390ha
	田 15,700ha
	畑 2,690ha
	耕地率 14.0%
	農家一戸当たり耕地面積 3.3ha

※H22鶴岡市の数値

ずか4%となっている。

温海地域の農業は、水稻を中心に、畜産、野菜、果樹などを組み合わせて複合的に営まれている。

■ むらづくりの概要

1. 地区の特色

一霞集落は、旧温海町のほぼ中心に位置し、戸数26戸、人口87人（平成26年3月末現在）が暮らす中山間地域の集落である。農地面積は35.3ha、うち13%が畑であり、大部分が水田となっている。戸数26戸のうち、20戸が農林業に関わり、中山間地域等直接支払交付金などを活用しながら農地の保全に努めている。

また、伝統農法である焼畑によって温海かぶの栽培が行われており、その栽培には400年以上の歴史がある。

温海かぶは、表面がきれいな赤紫色をしており、内部は白色、皮が薄く、肉質は緻密でやや硬く、甘みがあるのが特徴である。

一霞集落では、温海かぶの生産から加工・販売まで集落全体で取り組んでおり、生業としての営農活動につながるむらづくりを展開している。



写真1 焼畑温海かぶ

2. むらづくりの基本的特徴

(1) むらづくりの動機、背景

一霞集落のむらづくりのきっかけは、温海かぶの存続の危機であった。温海地域の温海かぶは焼畑農法で栽培されており、50年程前は、木材の値段も高かったことなどから、杉の伐採跡地を焼いてかぶを栽培し、その後に再造林するという形で健全な山林を育成する理想的なサイクルができていた

が、時代の変遷とともに変化が見られるようになってきた。木材価格の低迷によって杉の伐採が減ったため、伐採跡地で焼畑をすることが少なくなったことに加え、かぶ生産者の高齢化に



写真2 温海かぶ栽培畑

伴い、収穫したかぶを背中に背負って道路まで運搬するなどの過酷な労働が困難になってきた。

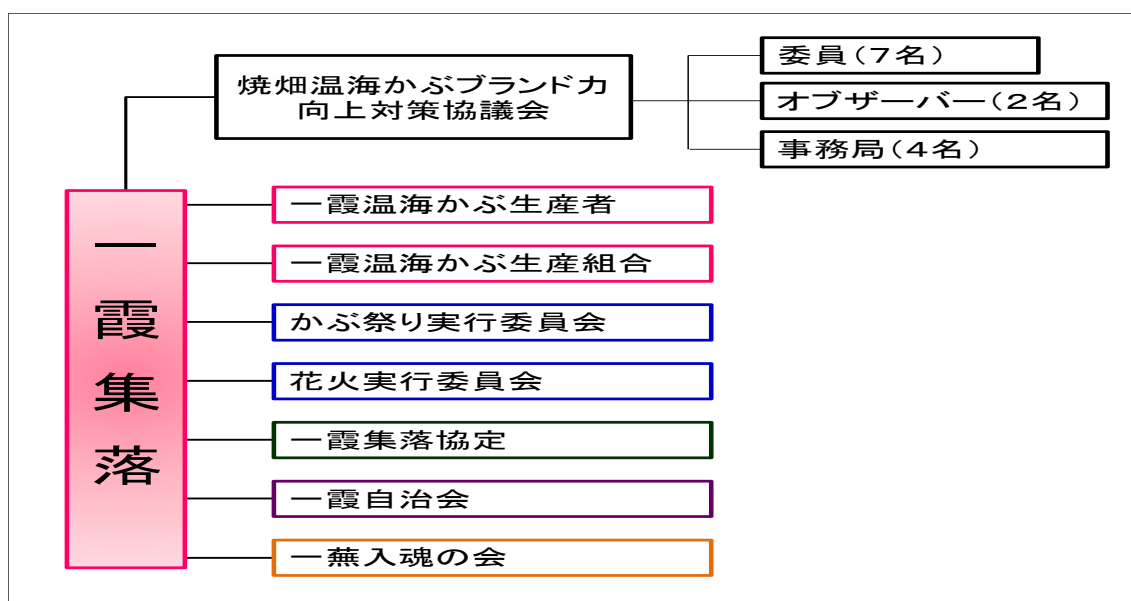
このようなことから、道路に面した場所など利便性を重視した場所で栽培が行われるようになり、同じ場所^{のりめん}で栽培を繰り返すことによる病気の発生や、休耕地や農地の法面などでの栽培による温海かぶの品質低下が見られるようになった。

こうした状況の中で、住民たちは、「私たちの世代が動かないと、伝統の農法が途絶えてしまう。」といった危機感が高まり、伝統農法で栽培する「焼畑温海かぶ」を集落全体で守り、文化を継承していこうとする機運が高まっていった。

（２）むらづくりの推進体制

一霞集落では、文化の継承と生業づくりを目的としたむらづくりを推進しており、かぶの生産から加工・販売まで、各組織と連携を図りながら集落内で一貫した取組を行っている。

第２図 むらづくり推進体制図



第２表 組織の取組み

組 織 名	構 成 員	活 動 内 容
一霞温海かぶ生産者	20戸	焼畑温海かぶの生産
一霞温海かぶ生産組合	6戸	直営の加工場を建設 漬物に加工
21世紀かぶ祭り i n 一霞実行委員会	自治会 生産者	毎年11月に一霞公民館を会場にイベントを開催 加工品等の販売
中山間地域等直接支払一霞集落協定	12人	「21世紀かぶ祭り i n 一霞」実行委員会との連携
一霞自治会	26戸	「21世紀かぶ祭り i n 一霞」実行委員会との連携
一蕪入魂の会	若手10人	焼畑体験ツアー企画運営による都市交流（文化の継承）

■ むらづくりの特色と優秀性

1. むらづくりの性格

温海地域では、樹木を伐採してから植林する前までの数年間、山の斜面を利用した焼畑農法により温海かぶの栽培が行われている。中でも一霞地区は、温海かぶ＝一霞と言われるほど特別な場所である。

一霞地区では、地域に伝わる伝承野菜「温海かぶ」をいち早く地域資源として位置付け、地域ぐるみの約束で正統な種子を守り、焼畑の作業、かぶ生産、漬物加工、販売まで一貫して取り組んできた。この徹底した姿勢を発信することにより、温海かぶ全体のブランドが確立されている。

一霞地区の取組は、農家と自治会、若者世代が連携した「かぶ祭り」や「焼畑体験ツアー」など地域内外の交流を目的としたイベントにもつながっており、条件不利地である中山間地域において、農林業所得の向上と担い手の確保に直結する「農林業振興」と「地域活性化」を兼ね備えている。

2. 農業生産面における特徴

(1) 焼畑温海かぶの差別化販売に向けた取組み

「焼畑温海かぶ」のブランド化を図るため、生産者、J A、行政等がメンバーとなって平成17年度に「温海かぶブランド商品開発推進協議会」を設立し、平成18年度には、無化学肥料・無農薬栽培で山形県特別栽培農作物の認証を取得し、他の温海かぶとの差別化を図った。同会は平成19年度に活動を終了したが、更なる差別化に向けて市、J A、直売所がメンバーとなり、平成24年度に「焼畑温海かぶブランド力向上対策協議会」を設立した。

協議会では、山形大学農学部の江頭准教授と山形県庄内総合支庁農業技術普及課の課長補佐にオブザーバーを依頼し、「優良な種子生産の支援・研究」、「栽培ガイドラインの作成」、「商標の取得」など、県及び市の補助事業を活用しながら差別化によるかぶの有利販売に向けた取組を行っている。

平成24年度の一霞温海かぶ生産組合における加工品（漬物）の販売額は約8,300万円となっており、平成28年度には1億円突破を目標に掲げている。

（２）イベントを活用した販売

毎年11月、集落の公民館を会場に「21世紀かぶ祭りin一霞」が、かぶ祭り実行委員会によって盛大に行われている。かぶ祭りでは農産物や山菜などの販売が行われ、県内外からの沢山のお客さんで大盛況となっている。中でもかぶ祭りではしか購入できない生食用かぶは、リピーターも多く即完売の盛況ぶりである。



写真 3

21世紀かぶ祭りin一霞

加工品は、県内の土産品店や大手スーパーでも販売しており、売れ行きも好調である。

（３）新たな商品開発への取組

焼畑温海かぶを使った新たな商品開発として、一霞出身者の阿部三喜夫氏（「西洋割烹花月」オーナーシェフ）や「食の都庄内」親善大使の奥田政行氏（レストラン「アルケッチャーノ」オーナーシェフ）の協力の下、商品化に向けた試作に取り組んでいる。

平成18年には、山形大学農学部^の江頭助教授を代表とする4名の研究グループにより、廃棄処分されていたかぶの茎や葉を材料とするフリーズドライ製法の「温海カブ葉^はウダー」が開発され、同年12月に「食の都庄内」親善大使の奥田氏がパウダーを練り込んだパスタとアイスクリームを紹介している。

また、温海地域に古くからある「あつみ温泉」の老舗旅館においても、朝夕食の食材として焼畑温海かぶを使った料理が提供されている。

3. 生活・環境整備面における特徴

（１）都市との交流による地域振興

「伝統農法を次世代に継承したい。」そんな思いを持った地域の30代～40代の若手グループ10人が集まり、平成22年に「一蕪^{ひとかぶ}入魂の会」を結成して活動を行っている。会員は、会社勤めの傍ら焼畑の技法や現代的な意義を学び、ふるさとが誇る文化の

魅力を発信する活動に取り組んでいる。

平成23年8月からは、「焼畑体験ツアー」を毎年企画し、県内はもとより、遠くは東京都や茨城県からも参加者が集まり、交流を深めている。

集落の古文書には、16世紀後半には既に焼畑が営まれていた記録があり、「一蕪入魂の会」は、一霞集落の暮らしを支えてきた小さな種子を次の世代に受け渡すために活動を実践している。



写真4 焼畑体験ツアー

(2) 食農教育

一霞集落で行われている焼畑農法は、8月に入ると草木を刈り払い、3日～4日晴天が続いて乾燥した頃を見計らって火を入れ、まだ灰が熱いうちに種をまくという農法である。このことによって、病虫害の発生を抑制するとともに、低い温度では発芽しにくい温海かぶの種が熱さで発芽しやすくなる。

このような地域の伝統農法を、集落の子供たちに伝え、継承してもらいたいとの願いを込め、平成15年から、集落の農家が先生となり、温海小学校3年生（約30名）に対して、焼畑体験、かぶの種まきと収穫、漬物加工など一連の体験を通した食農教育に取り組んでいる。



写真5

児童による種まき

また、平成25年から焼畑や集落に興味を持つ大学生や先生に、伝統野菜の研究の一環として農家に宿泊してもらい、食への関心を深めてもらう取組を行っている。これにより、地域の文化や暮らし、これまでの取組が対外的に評価され、住民が地域に自信を持ち、地域への愛着と誇りとにつながっている。

(3) 花火大会とキャンドル祭り

一蕪入魂の会は、平成22年から「かすみの夜空に花火を上げ

よう実行委員会」を組織し、毎年1月1日に「一霞新春ミニ花火大会」を開催している。

花火大会は、住民が楽しく参加しやすい環境を提供することで、集落内外の世代を超えた絆を強める取組となっている。

また、平成23年3月11日に発生した東日本大震災により甚大な被害を受けた被災地の復興を願い、花火大会との同時企画として「一霞キャンドル祭り」を開催している。



写真6 花火大会と
キャンドル祭り